コーパスに基づく文法化研究：日英語の理由節の通時的研究

東泉 裕子
東京海洋大学他

１．本発表の目的

(a) 日英語の理由節（「から」節と because 節）の機能拡張の過程を通時的に比較対照する。
(b) そのために集めたデータ、その収集方法を提示する。
(c) コーパスに基づく文法化研究の今後の課題を検討する。

２．コーパスに基づく文法化の研究例：Higashiizumi (2006)より

２．１．現代口語における日本語の「から」節と英語の because 節

日本語の「から」節と英語の because 節は理由を表す従属節と言われているが、現代語には必ずしもそうとは言えない用例も多い。(1) は理由を表す従属節の例、(2) と (3) は理由を表すとも従属節とも言いがたい例、(4)は独立節と語用マーカー（pragmatic marker、以下、PM）とも分析できる例である。

(1) [subordinate clause: content conjunction interpretation]
a. 太郎は花子を愛しているから戻ってきた。
b. John came back *because* he loved her. (Sweetser 1990: 77)

(2) [paratactic clause: epistemic conjunction interpretation]
a. 太郎は戻ってきたから、花子を愛しているのだろう。
b. John loved her, *because* he came back. (Sweetser 1990: 77)

(3) [paratactic clause: speech-act conjunction interpretation]
a. そこにソースがありますから、自由にとってください。 (Alfonso 1966: 545)
b. What are you doing tonight, *because* there's a good movie on. (Sweetser 1990: 77)

(4) [independent clause + PM ／ PM + independent clause]
a. すみませんが、もう終わりですから。 (Alfonso 1966: 1203)
b. *Because* you don't understand. (Schiffrin 1987: 200)

２．２．日本語の「から」節と英語の because 節の歴史

両節が (1) – (4) の用例をもつに至る歴史的経過を調査した。そして、節接続の面では非従属節への拡張、意味・語用面ではより主観的な意味への拡張であることが分かった。

(5) The development of *kara*-clauses and *because*-clauses in terms of clause-combining constructions

(subordination >) hypotaxis > parataxis > paratactic to discourse
less paratactic more paratactic

(6) The development of *kara*-clauses and *because*-clauses in terms of semantic/pragmatic function

	content conjunction interpretation	less subjective
>	epistemic/speech-act conjunction interpretation	▯
>	pragmatically invited (or imposed) conjunction to discourse	more subjective

２．３．日本語の「から」節と英語の because 節の歴史と文法化

文法化（ grammaticalization ）とは「ある要素が文法的機能を果たすようになり、さらにその機能を拡張していく変化」（Hopper and Traugott 2003[2]）である。その方向には一定の傾向があることが指摘されており、単方向の仮説（unidirectional hypothesis）と呼ばれている。本研究では、この仮説うち、次の２点について検討した。

(7) 節接続の傾向（cline of clause-combining constructions）：非従属節から従属節へ
(8) 主観化（subjectification）：より主観的な意味へ

そして、次の３点を指摘した。

(a)「から」節と because 節の機能拡張は、主観化を伴う文法化の一例であると言える。
(b) (5) は (7) と逆方向の拡張、(6) は (8) の方向への拡張である。
(c) (7) は、他にも反例と思われる事例が報告されており、今後の研究が期待される。

３．データについて

３．１．収集方法

・小説や台本の会話部分、文字化した話し言葉（Onodera 2004, Suzuki 1999）
・１作品につき１０例まで（Suzuki 1999）
・１著者につき１作品（歴史的データが不足する場合は２作品まで）

３．２．分類方法

・50年ごと
・節接続形式の拡張過程の調査

(a) [CL1カラ CL2]	(a) [CL1 *because* CL2]
(b) [CL1、CL2カラ]	(b) [*Because* CL1, CL2]
(c) [CL カラ]	(c) [*Because* CL]
(d) その他	(d) その他

・意味・語用の拡張過程の調査
Sweetser(1990)の意味・語用の３分類（content conjunction、epistemic conjunction、speech-act conjunction、以下、CC、EC、SC ）に基づいて観察した。３つの意味はいつ頃から形式に反映されるのか観察するために、(a)-(c)に現れる EC/SC の読みを表す表現(例えば、(2a)「のだろう」(3b)「てください」など)を調査した。

３．３．日本語のデータ

・江戸・東京方言　(1700年代から1949年：335例、1950年から2000年：207例)

・データ

(a) Japanese Text Initiative Collection, University of Virginia

(b)日本古典文学作品データベース

(c)新潮文庫の100冊、青空文庫

(d)李麗燕（2000）『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』くろしお出版

(e)『日本語ジャーナル』（1999.4-2000.3）「おしゃべり生中継」アルク

３．４．英語のデータ

・英国南イングランド方言（1590年代から1949年：313例、1950年から2000年：268例)

・データ

(a) 予備調査：Helsinki Corpus （以下、HC）（1350年から1710年：94例)

(b) Project Gutenberg 他

(c) London-Lund Corpus of Spoken English （以下、LLC）（1960s, 1970s)

(d) British National Corpus （以下、BNC）（1980s, 1990s)

４．データ分析

４．１．日本語の「から」節

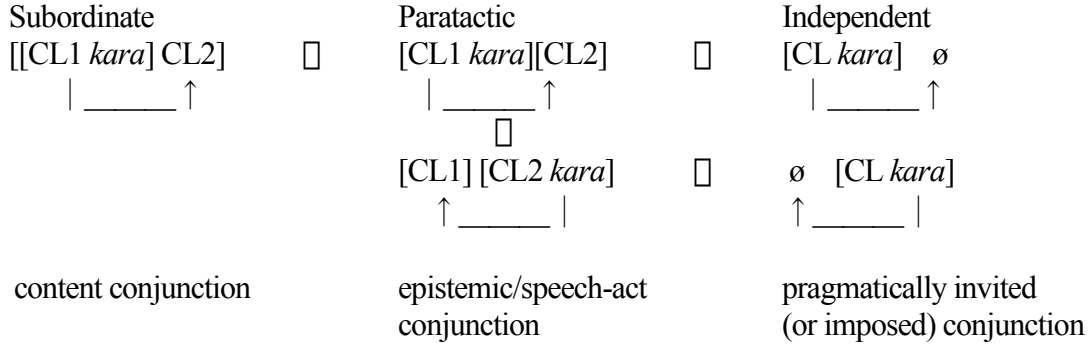
・先行研究

「から」は、奈良時代は形式名詞、平安時代は格助詞として使用され、江戸時代に接続助詞に分化する。さらに、1）1760年頃から使用頻度が高くなり、2）1850年頃から CC に相当すると考えられる用法の割合が漸減し、3）「文末用法」が20世紀から急増する（吉井 1977)。

・Higashiizumi (2006)

節接続は(a)[CL1カラ CL2]から(c) [C カラ]への拡張、意味・語用は CC から EC/SC への拡張であった。節接続については、(a)は1850年代以降漸減、(b)は 1850年代以降増加、(c)は1900年代以降増加することが分かった。意味・語用については、1850年代以降、(a)と(b)の主節では EC/SC の表現が60%以上、「から」節では EC の表現が30-50%を占めるようになる。(c) では EC/SC の表現が1950年代以降増加することが分かった。

(7) Structural and semantic/pragmatic extension of *kara*-clause constructions in PDJ



４．２．英語の because 節

・先行研究

because は、古フランス語の借用語 by（the）cause（that）から生じた。14世紀頃から様々な語形で使用され、15世紀頃から that の使用が減り、16世紀頃から because の形で使用されるようになる。（HC を使用した今回の予備調査でも確認。）

・Higashiizumi（2006）

節接続は(a)［CL1 *because* CL2]から(c)[*Because* CL]への拡張、意味・語用は CC から EC/SC への拡張であった。節接続については、(c)が19世紀後半頃から徐々に増加し、現代語では BNC（written)で約16%、BNC（spoken)で約10%、LLC で約13%を占める。意味・語用については、EC/SC の表現が、(a)では主節、because 節で増加傾向にあり、(c)では1950年代以降現れることが分かった。

(8) Structural and semantic/pragmatic extension of *because*-clause constructions in PDJ

Subordinate	Paratactic	Independent
[CL1 [*because* CL2]] □	[CL1] [*because* CL2] □	ø [*because* CL]
↑_____ |	↑_____ |	↑_____ |
content conjunction	epistemic/speech-act conjunction	pragmatically invited (or imposed) conjunction

５．今後の課題

・文法化研究への日本語からの貢献（Ohori, ed. 1998, Onodera 2004, Suzuki 1999, 日本語の研究1-3）

・コーパスに基づく歴史的言語研究（秋元編 2001、秋元他編 2004、秋元・保坂編 2005）

・日本語の研究用コーパスの整備

主な参考文献

秋元実治編. 2001.『文法化－研究と課題－』東京：英潮社.

秋元実治他編. 2004.『コーパスに基づく言語研究　文法化を中心に』東京：ひつじ書房.

秋元実治・保坂道雄編. 2005.『文法化－新たな展開－』東京：英潮社.

Higashiizumi, Yuko. 2006. *From a subordinate clause to an independent clause: A history of English because-clause and Japanese kara-clause*. Tokyo: Hituzi Shobo.

Hopper, Paul J., and Elizabeth C. Traugott.. 2003 [1993]. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ohori, Toshio, ed. 1998. *Studies in Japanese grammaticalization: Cognitive and discourse perspectives*. Tokyo: Kurosio Publishers.

Onodera, Noriko O. 2004. *Japanese discourse markers: Synchronic and diachronic discourse analysis*. Amsterdam: John Benjamins.

Sweetser, Eve. 1990. *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Suzuki, Ryoko. 1999. Grammaticization in Japanese: a study of pragmatic particle-ization. Ph.D. dissertation, University of California, Santa Barbara, USA.

吉井量人. 1977.「近代東京語因果関係表現の通時的考察－「から」と「ので」を中心として－」国語学110, 19-36.